

「人面桃花」という古典（漢文）教材の一考察

——「買粉兒」「霍小玉傳」との關わりから——

堀

誠

二〇一三年度にスタートした新しい高等學校學習指導要領下の基本となるものを全面的に受けた総合的な言語能力を育成する科目である」と位置づけられている。今次の改訂の眼目には傳統文化の教育があり、「國語總合」の必修科目化は、「古典」の學習が高等學校において必須となるという重要な意味をもつ。そして、選擇科目である「國語表現」・「現代文A」・「現代文B」・「古典A」・「古典B」の五科目は、原則として「國語總合」を履修した後に履修することになる。

新教科書は二〇一三年度から學年進行で使用されているが、第一學年での使用となる「國語總合」の教科書は、九社（東京書籍・三省堂・教育出版・大修館・數研出版・明治書院・筑摩書房・第一書房・桐原書店）二十三種のテキストが檢定刊行されている。また、第二學年以降に使用される選擇科目の「古典A

は、四社（東京書籍・教育出版・右文書院・第一書房）五種、「古典B」は、十社（東京書籍・三省堂・教育出版・大修館・數研出版・明治書院・右文書院・筑摩書房・第一書房・桐原書店）十八種のテキストが檢定刊行されている。その古典學習に關する教科書環境の中で、漢文の教材を一覽してみると、片や「國語總合」の教材として、また片や「古典B」の教材として、兩様に採用されている漢文教材がある。いわゆる「人面桃花」と題される唐代傳奇小説による教材は、「國語總合」の教科書の中で、大修館書店の「國語總合」〔古典編・漢文編〕六「唐代の物語」〔漢文のとびら（桃いろいろ）（一海知義）を含む〕および「新編國語總合」〔古典編・漢文編〕4「物語へのいざない」〔鶏鳴狗盜〕とで構成）の一社二種にテキスト化されている。また、「古典B」の教科書の中で、明治書院の「高等學校古典B」〔漢文編後編〕3「小説」〔死友〕「酒蟲」とで構成）、な

らびに三省堂「高等學校古典B」(漢文編) 第二部・四「小説」
 [李復言「杜子春傳」とで構成] および「精選古典B」(漢文編)
 第二部・三「小説」[李復言「杜子春傳」とで構成] の二社三種
 にテキスト化されている。

この「國語總合」と「古典B」とに教材として採用される
 「人面桃花」をめぐる、その教學の環境を視野に入れて考察
 を試みたい。とりわけ注目してみたいのは、崔護と女の出會い
 にはじまる物語の末尾に認められる、女の死と蘇生についてで
 ある。

*

俗に「縁は異なもの味なもの」という。思えば、人を迎え人
 を送り出す門は、一つの境界として樞要な意味をもち、さまざま
 まに人の出會いと別れを演出する空間となっている。

唐代傳奇小説に例を取れば、その白眉と稱される白居易の弟
 白行簡の「李娃傳」では、科擧試験を受けるべく上京した男主人
 人公が、都見物の途中で、平康坊の東門から鳴阿曲に入ると、
 家の門の入り口で侍女に寄りかかった絶世の女を見初める。馬
 上の彼は心を奪われ、ときめきの時間を稼ぐためにわざと馬鞭
 を落とし、後から来る侍者が拾うまで待ちに待つ。その間、氣
 を引かれた女も秋波を送る。この熱い視線の遣り取りが色戀の
 端緒を開き、後日、都の消息に通じた先輩の指南もあって、女

が長安に名高い倡妓の李娃であることが分かると、男はときめ
 きの成就のために行動を起こす。その家に下宿するとの名目で
 李娃との好縁をかたじけなくするにいたるも、一年後には二年
 分の生活費を蕩盡して金の切れ目が縁の切れ目とばかりに棄て
 られ、挽歌歌者から乞食にまで零落する悲劇のストーリーが幕
 を開ける。やがて李娃と再會するの、また門が關わる。降雪
 の中、唯一左扉が開いていた門口で飢凍を訴える男の聲。聲の
 主こそあの人と知って男を救い、科擧及第と立身への内助の功
 にまつわる終盤の物語に展開する。

このような出會いと再會の仕組みをもつ「李娃傳」に對して、
 「人面桃花」もまた門の空間が男女の出會いの場として第一に
 出現する。加えて、翌春に再び訪れたものの女に再會できず、
 「人面桃花」の詩篇を書き残したのがまた出會いの門に他なら
 ない。そして數日後に重ねて訪ねては門口に現れた女の父に難
 詰されて、かくて女の尸との再會と再生の物語に導いていく。
 まさに門が有機的に機能する。

そもそもこの「人面桃花」は唐の孟榮の『本事詩』に典し、
 宋の『太平廣記』には卷二七四「情感」に「崔護」の題で「出
 『本事詩』として引載される。「崔護」は次のように語り起こ
 される。

博陵の崔護は、資質甚だ美なるも、孤潔にして合ふこと寡

し。

(博陵崔護、資質甚美、而孤潔寡合。)

博陵の崔護は器量才能すぐれた人物ながら、孤獨で潔癖なために意氣投合できる友もないとの人となりで紹介される。科擧の進士科を受験しながら合格とはならず、清明の日に獨りで長安の都城から南郊を散策して、一畝の廣さの屋敷を通りがかる。清明は「掃墓」の日であると同時に、新緑を楽しむ「踏青」の遊樂の時候でもある。折りから時節の花木が生い茂り、ひっそりと人もいない様子の屋敷に行きいたる。

まさに花木は桃花源にいざなうがごとく、門を叩く崔護に對して、門隙から來意を問う女。一杯の水を所望する崔護を門中に迎え入れて牀を勧めて、自らは獨り桃の斜めに伸びた枝柯えだに寄りかかる女は「意屬殊に厚し」と崔護に好感を抱いている様子が描かれ、佇む女の容姿は「妖姿媚態にして、余妍有り」と記される。

名高い劉晨・阮肇の異郷訪問さながらの展開であるが、この女に向かつて、崔護は「言を以て之に挑む。」と記される。その「以言挑之。」の字句は、漢の武帝の時代、いまだ立身せぬ貧書生の司馬相如が招かれた臨邛の金満家卓王孫の屋敷で、出戻りの卓文君にねらいさだめて得意な琴のメロディーに心をこめた一節の「以琴心挑之(琴心を以て之に挑む)。」の文字こそ、

「人面桃花」という古典(漢文)教材の一考察(堀)

表現上の源泉か。

自らの言の葉をもって直に思いを通じようとした崔護に、女は「對へず(不對)」、ただ「目注すること之を久しくす(目注者久之)。」と描かれる。その表記の中に、女の恥じらいが讀みとれる。

かくて言葉を交わすことなく辭去する崔護に對して、情にたえざる風情で内に入っていく女。崔護も睽睽たる思いのまま歸路につくのであり、まさに思いを通じ得ぬ二人であった。

翌年の清明の日、春の陽氣に誘われて、ふと去年のこの日を思い出した崔護は、感情を抑えられずに眞っ直ぐ南郊の屋敷を訪ねる。門と牆壁のようすは變わらないが、かんぬきは閉ざされている。崔護はやむを得ず詩を左扉に書きつけて立ち去る。

去年今日此門中 (去年の今日 此の門の中)

人面桃花相映紅 (人面 桃花 相映じて紅なり)

人面不知何處去 (人面知らず何れの處にか去るを)

桃花依舊笑春風 (桃花舊に依りて春風に笑むと)

まさに去年の今日、この門の中で目の當たりにした女の容顔と桃の花の照り映えた光景。その去年の今日と現在の光景との對比的な發想は、大宰府に貶謫された菅原道真が重陽の節句に際會して「九月十日」詩に、「去年今夜侍清涼(去年の今夜

清涼に侍りき」といまだ都にあつて清涼殿に侍御した「去年の今夜」の榮光と、貶謫された大宰府の地での落魄を詠唱した詩篇にもうかがえる。この崔護の詩では、去年迎えてくれた女の「人面」と目の前の「桃花」を對比する。閉ざされた門を前にして、あの人はどこへ行ったのか、桃の花が變わることなく春風に笑み咲くばかりであると詠じてるのである。

年年歲歲花相似 (年年歲歲 花相似たり)

歲歲年年人不同 (歲歲年年 人同じからず)

この唐の劉希夷の「代悲白頭翁」詩の對句は、「花」と「人」とを對比した詠唱として人口に膾炙する。その對照に同じく、美しき「人面」の主と馥郁たる庭の「桃花」のコントラストが詩中に描出されるが、その對比がこの詩を讀んだ女の心に影をつくる。流れた時間と容顏の移ろい。その切ない胸中は、女の父が話すことばに明らかになる。

數日後、たまたま都城の南に出かけ、その歸路に再び訪ねた崔護は、中から慟哭する聲を耳にする。門を叩いて聲をかければ、現れた年老いた父が、「君は崔護に非ずや」と問いかける。そうだと答える崔護に向かって、哭しながら「君 吾が娘を殺せり」と告げる父。驚いて立ち盡くす崔護に向かって父は語る。笄年にして學問をしていまだ嫁がぬ娘であったが、昨年來、い

つも恍惚として失うところあるがごとき様子であったという。先日いっしょに外出して歸宅した折、左扉に書きつけられた詩の文字を讀むや、門を入ると病んで、ついには絶食すること數日にして命はなくなつたという。娘が嫁がなかつたのは、君子たる男を探し求めて父の身を託するためであつたともいふ。不幸にして死んだのは崔護のせいであると大いに哭する父。

崔護も心を打たれて、哭禮をとるべく請えば、儼然として牀に在る女。崔護がその首を擧げてその股に枕させ、慟哭して「某斯に在り、某 斯に在り」と祈れば、しばらくして女は目を開き、半日して蘇生する。父も大いに喜び、娘を崔護に嫁がせたいという。

この「人面桃花」の故事は、いわゆる宋代の「說話」なる話藝の世界で、「小説」と稱された讀み切り短篇型の題材となつて口演されたことも知られる。宋の羅輝の『醉翁談錄』卷一「舌耕敘引」「小説開闢」に、その時代の「小説」の演目あるいは話本らしきものを傳録し、その「傳奇」類の中に、「李亞仙」(「李娃傳」)「鶯鶯傳」「章臺柳」「卓文君」とともに「崔護覓水」が認められる。

この「崔護覓水」なる名稱は、いわゆる「人面桃花」の題が崔護の詩中の四字に基づくものであるのに對して、話題の開端を開く「水を覓める」という所爲に由來することはいふまでもない。いづれにしてもこの故事は、唐の孟棻の『本事詩』を典

據として知られる。

門を戀のときめきの空間とする話題でもあり、それ以来、翌年まで心にぽっかり穴が空いたがごとき女の様子に加えて、詩を讀んだ女の心身の變化とその急逝。そして、再び訪ねた崔護がその體を抱いて行つて行く祝願と女の再生。そのモチーフの中で、「崔 其の首を擧げて、其の股に枕せしめ、哭して祝して曰」う「某在斯」の文字は、『論語』「衛靈公」篇に見ることが知られている。すなわち、孔子は、訪ねてきた師（盲目の音樂師）の冕が階段に差しかかると、「階なり」と教え、座席までくると「席なり」と教え、皆が着座すると、「某在斯」（誰それはどこにいる）と一々告げたと傳えている。まさに「師を相くる道」を説いた一條に他ならないが、崔護の言は、その文字を「盲樂師」ならざる「幽冥」との境界にある女の魂魄を導き戻す呪文のごときことばに轉用したか、と思われる。しかし、この祝願の行爲がこの話に限って認められるものかといえ、そうではないことが明らかである。

＊ ＊

『太平廣記』卷二七四「情感」の巻頭話にして「崔護」の直前に配される「買粉兒」（『出』『幽明録』）にまた祝願と再生にいたるプロットを認めることができる。

ある金持ちの家の一人息子として溺愛されて育つた男は、市

「人面桃花」という古典（漢文）教材の一考察（堀）

に出かけて白粉を商う美しい女に一目惚れする。しかし、思いを伝えるすべもなく、白粉を買いに毎日市に出かけたが、白粉を買うと、そのままたち去り、ことばをかけることもなかった。だんだんに日数が重なり、女はひどく疑い、翌日やって来た男に、「あなたは白粉を買って、何にお使いですか」と尋ねれば、息子は「心中慕っていました、思いを伝えられませんでした。いつもあなたに逢いたさのために、白粉を買うことにかこつけて姿を觀にきていたのです」と答える。女は感じ入り、とうとう私に逢うことを約束して、翌日の夜と決めた。その夜、男は部屋で女を待った。夕暮れに果たして女がやって来ると、男はその悦びにたえず、女の腕をにぎると、「ようやく宿願がかないます」と歡び勇躍したまま事切れてしまった。女が恐懼したのも無理はなく、譯も分からず逃げだして、夜明けに店に還りつた。

男の家では、食事になっても起きてこないの、父母が不審がって様子を視にいけば、息子はすでに死んでいた。殯儀に際して、篋スエカの中を開いてみると、百余りの白粉の包みが大少とり混ぜて一山になっている。「我が兒を殺せしは、必ず此の粉なり」と直感した母親は、市に入ると白粉を賣る店を遍くまわる。この女の店の順番になり、比べてみると、包みの手跡が先のもと同じであった。女を執とらえて「何ぞ我が兒を殺すや」と問いただすと、女は嗚咽して、ありのままに事實を陳べた。

父母は信じず、ついに役所に訴え出た。女は「妾、豈に復た死を慄おそまんや」と、一たび尸に臨んで哀を盡さんことを乞いもとめた。縣令はこれを許すと、眞つ直ぐに行き、尸を撫でながら、「不幸にして此を致す。若し死魂にして靈あれば、復た何ぞ恨まんや」と慟哭すると、息子は豁然として生き返って、その事情を子細に語った。

かくて二人は夫婦となり、子孫も繁榮したという團圓の一話であるが、この話の典故となる『幽明録』は、『世説新語』を撰したことで知られる劉宋の劉義慶の撰になる。この話では、女が急逝した男に向かって尸を撫でながら死魂に哀惜の語を發するのであり、行爲者の性別を異にするが、その祈誓の趣旨に異なりはない。時代的に唐代から、六朝の劉宋の時代にまで溯ることになる。

興味深いのは、明の馮夢龍が『太平廣記』に編纂の手を加えた『太平廣記鈔』に見える評纂の記述である。この『太平廣記』のダイジュスト版とも稱すべき『太平廣記鈔』は、卷十九「感應」に「買粉兒」の題を「賣粉兒（出『幽明録』）」に變え、これと「崔護（出『本事詩』）」のタイトルを並べて示し、話を續けて記すとともに、馮夢龍は末尾に、

一事恰好對股文字。

（事は恰好なる對股の文字なり。）

との評語を付している。「一事」はもちろん「賣粉兒」と「崔護」を指すが、その「恰好對股文字」は何を意味するか。「對股」は、「對」が對の概念を、「股」が枝や釵などの二又の片方を表すことから、一對なり對偶なりの二つで一組を意味するのである。すなわち、男が女を、あるいは女が男を、哀哭して靈魂を復するところに「對股」の意味があろう。それぞれの話がもつ六朝あるいは唐という時代を超越して、馮夢龍はそれらもつ話型に着眼し、その好一對の類例として評纂を加えたことが明らかである。

しかのみならず、唐代傳奇の代表的な一篇、蔣防の「霍小玉傳」（『太平廣記』卷四八七「雜傳記四」所載）にもまた男が女を哀哭する類例を見ることができる。

* * *

大曆十才子の一人に數えられた李益を男主人公とするこの「霍小玉傳」において、科擧受験のために長安の都に出た李益は、媒酌家業の鮑十一娘の仲介を得て、霍王の娘、小玉と結ばれる。李益がかくて巫山・洛浦のごとき歡愛を盡くした深夜、霍小玉はふと涕を流してじっと見つめていう。

妾本倡家、自知非匹。今以色愛、托其仁賢。但慮一旦色衰、恩移情替、使女羅無托、秋扇見捐。極歡之際、不覺悲至。

(妾は本より倡家なれば、自ら匹に非ざるを知る。今 色を以て愛せられ、其の仁賢に托す。但だ慮るは一旦 色衰へなば、恩移り情替はり、女羅をして托する無く、秋扇をして捐てられしめんことを。極歡の際、覺えず悲しみ至る。)

「女羅」とは蔓草の名で、「女羅無托」はその蔓草が寄る邊を失うことをいう。つづく「秋扇見捐」は秋となって不用となつた扇が捨てられることをいう。先取りしていえば、霍小玉の生さざまを象徴するのが、まさに「秋扇」の二字であるといつてもよい。しかし、無闇に寄る邊を失つて捨てられるのではない。その前提となるのが「一旦色衰、恩移情替」の字句である。すなわち小玉の容色が衰え、その結果として李益の情愛が移り離れてしまうことを憐んでいるのである。「捐」は漢の班婕妤が自らの身の上を「扇」になぞらえて詠じた「怨歌行」の詩篇にいう「棄捐」の語に由來することはいうまでもない。もとより「女羅」も「秋扇」も、霍小玉の身の行く末をたとえていうものであることは明白である。

それとともに、老若を問わず日一日としのびよる肉體的な衰老は如何ともなし難いものであろう。「秋扇」にいう「秋」とは、涼風が炎熱を奪いさる時節であるばかりでなく、副次的には時節の推移にともなう年齢の進行、肉體的な衰老をも内包するのであろう。それは人生の秋を意味するものでもあろう。

「人面桃花」という古典(漢文)教材の一考察(堀)

「秋扇」の語義的世界は含蓄に富み、か細い聲でこうささやかれた李益は、何としても粉骨碎身して相捨てざることを素練に記す。小玉の口から出た「女羅」「秋扇」の語は、わが行く末を危惧して男の人情に訴えるに効果絶大であったことは確かである。

しかし、二年後の春、書判の任用試験に及第した李益は、四月に鄭縣の主簿に赴任し、八月には迎えを寄越すと小玉に約束しながら違え、親の決めた盧氏との縁談を断れずに婚儀を整える。この間、連絡の無いまま、小玉は李益の薄情を恨んで病床について生活もままならず、かつて小玉が口にした「秋扇」のはかない身の上が現實のものになる。

約束に背いて負い目を感じる李益は、婚禮のために上京しても小玉に知られまいと避けて過ぐす。しかし、小玉の薄幸を不憫がる豪侠の人士の機轉によって、李益は圖らずも小玉と再會する。病床から立ちあがった小玉は、横目で李益を睨み、酒を注ぎながらいう。

我爲女子、薄命如斯。君是丈夫、負心若此。韶顏稚齒、飲恨而終。慈母在堂、不能供養。綺羅弦管、從此永休。微痛黃泉、皆君所致。李君李君、今當永訣。我死之後、必爲厲鬼、使君妻妾、終日不安。

(我 女子と爲り、薄命 斯くの如し。君は是れ丈夫なるも、

中國詩文論叢 第三十三集

心に負くこと此くの若し。韶顔稚齒、恨みを飲んで終はる。慈母堂に在るも、供養する能はず。綺羅弦管、此れ従り永く休まん。痛みを黄泉に徴せんは、皆君の致す所なり。李君 李君、今當に永く訣るべし。我死するの後、必ず厲鬼と爲りて、君の妻妾をして、終日安からざらしめん。

李益の「負心」と小玉の「薄命」。その因果によって、母への孝養もつくしえぬまま恨みを飲んで死んでは「厲鬼」となる。との小玉のことは、李益への怨念に満ちた呪文といつていい。小玉はそのことを吐きすてると、左手を伸ばして李益の腕を握り、盃を地面に擲って長慟號哭すること數聲にして息絶えたのであった。

注目したいのは、小玉の母が屍を李益の懷に置いてその名を喚ばせる一節である。

母乃舉屍、置於生懷、令喚之。遂不復蘇。

(母乃ち屍を舉げて、生の懷に置き、之を喚ばしむ。遂に復た蘇らず。)

「喚」は、さげぶ、聲をかけて呼びまねくことを表そう。しかるに、小玉は蘇ることはなかったと記している。「秋扇」の身となった霍小玉の末路は薄命そのもので、怨恨に充ち満ちて

いたといえる。「厲鬼」と化した小玉のなせる報いは、李益をして妻に猜疑ならしめて三たび娶るも妬嫉は改まらなかったと傳える。その妬嫉を擲擧した「李益疾」の醜名こそ、夭歿した小玉が未代に残し得た遺恨の表れといえようか。

「秋扇」の末路としても悲惨極まりない話であり、その悲惨さは男の懷に屍を置かれて名を喚ばれながら蘇生すること無き末期に象徴される。この「霍小玉傳」は馮夢龍の『太平廣記鈔』において最終第八十卷「雜志」の大尾を飾る一篇となっているが、この死後をめぐる部分に評語の類はないことを付記する。

以上を總していえば、若い男女の戀愛をめぐる話題の中において、その情愛に由來して男女の一方が死にいたる話容をもつものは一篇ならず存在する。そこに共通して認められる、残された一方が哀哭して屍に呼びかける行爲は、息を吹きかえすかどうかを問わず、まさに死者の魂魄を呼びもどすための「復」の習俗が根底にあることはいままでもない。いわゆる「復」の儀禮については、『禮記』『靈運』篇に、

及其死也、升屋而號、告曰、「皋！某復。」然後飯腥而直執。

(其の死するに及びてや、屋に升りて號び、告げて曰く、「皋！某復れ」と。然る後に腥を飯せしめて而して執を直む。)

と記す。「某復」はその死者を呼びもどす「招魂」の行爲に他ならず、「某^{だれそれ}」よ、あの世に逝くことなく戻りきたれ、と呪願するのである。それは屋根に昇って號ぶというが、日本においては魂魄が「黄泉の國」に歸していくとの考えから、地中に深く掘りぬかれる井戸に向かって大聲で行くなと呼ばわること⁽⁴⁾も知られる。これもまた同じ趣旨にある。「復」に關しては同じく『禮記』『喪大記』に、

復衣不以衣戸、不以斂。婦人復、不以禭。凡復、男子稱名、婦人稱字。

(復衣は以て戸に衣せず、以て斂せず。婦人の復には、禭を以てせず。凡そ復するには、男子は名を稱し、婦人は字を稱す。)

婦人のばあいは「字」を、男子のばあいは「名」を呼稱し、その後に死事を執り行うという。「禭」は、婦人が嫁いだときの上衣。「人面桃花」には「某在斯」、「買粉兒」には「若死魂而靈、復何恨哉」とのことばが、また「霍小玉傳」には「令喚之」の語が見えるが、呼びかけには相手を特定する名や字が用いられたのであろう。さらに『禮記』『問喪』篇には、斂葬に關しての次の記載がある。

「人面桃花」という古典(漢文)教材の一考察(堀)

三日而斂。在牀曰尸。在棺曰柩。

(三日にして斂す。牀に在るを尸と曰ふ。棺に在るを柩と曰ふ。)

その「三日而斂」に關しては、同じく「問喪」篇に「死三日而后斂(死すること三日にして後に斂す)」の意味を解して、三日哭してその生きかえることを俟つのであり、三日にして生きかえらなければもう生きかえることはないと思ひ定めることが記される⁽⁵⁾。

教科書教材に立ち返ってみると、「人面桃花」において崔護が生前のままの姿で横たわる女に哀哭して「祝」したのは、一見すれば崔護に限って行われたドラマチックな行動のごとくに映る。ただそれは、いわゆる「哭」や「復」の習俗儀禮の中に息づく行爲でもあり、假に若い男あるいは女の非命という特異な環境の中で行われたとしても、その屍を抱いて行われる行爲自体は習俗として一般的な梓組みの範疇にあり、複数の事例の中にあると考えられる。プロットに對する理解をする上で、この行爲自体がもつ習俗儀禮的な意味を認識することは、異土の文學を學習する上で缺くべからざるものであろう。その習俗儀禮に際して發揮されたその深い情愛こそ肝要であるが、それをいわゆる「志怪」の「怪」や「傳奇」の「奇」に偏して一方的に理解や解釋を試みることは、ある意味では、ストーリー

の本質を見失いかねない危険な一面をもつことになろう。

啓蟄一候に咲く桃花は爛漫の春をことほぎ、桃花源の異郷を彷彿とさせる。劉備・關羽・張飛三兄弟の桃園結義の舞臺を彩り、また若い女を象徴して『詩經』「桃夭」に華・實・葉を詠唱して婚姻と多産による繁榮を唱う。かつ度朔山に生える桃樹の北東方の鬼門にまします神荼・鬱壘や西王母ゆかりの不老長生の果實（蟠桃）の相承もあり、その呪的な意味も含めて桃は多様な屬性を秘めるところである。その花と人とが對比されるとともに、「人面桃花」の故事は男女の戀愛とその死をめぐる習俗儀禮の中に活きていると認識される。指導書の解説や注釋の類を検討しても、この觀點に立ったコメント等は十分には行き届いてないようである。ここに敢えて同じ類型の中にある複数の話を示し、かつそこに共通するプロットに着眼して上記のごとき考察を試みる所以である。

【注】

(1) 「以琴心挑之。」の字句は、『史記』卷一一七「司馬相如列傳」ならびに『漢書』卷五十七上「司馬相如傳」にある。

(2) 『醉翁談錄』癸集卷一「不負心類」には「李亞仙不負鄭元和」のテキストを収録し、「亞仙」を長安の娼女李娃の「字」とし、その男主人公は「滎陽の鄭生」、字は

「元和」とする。一人の字はこうした「小説」なる話藝の世界に生じたものらしい。また、日本においても、室町時代に『李娃物語』に翻案されていることを付記する。

(3) そのテキストは、北宋の『太平廣記』卷二七四「情感」篇に「崔護」の題で「出『本事詩』」として掲載され、また、南宋の皇都風月主人の『綠窗新話』卷上にも「崔護覓水逢女子」の題で「出『本事詩』」として引載されている。

(4) いわゆる「魂よばい」「魂よび」と呼ばれる死生の精神風土に關わる習俗である。

(5) 『禮記』「問喪」篇に、「孝子親死、悲哀志瀧。故匍匐而哭之。若將復生然。(孝子は親死すれば、悲哀して志瀧ゆ。故に匍匐して之を哭し、將に復た生きんとするがごとく然す。)」と記して、さらにその故に「三日而后斂者、以俟其生也。三日而不生、亦不生矣。(三日にして后に斂するは、以て其の生きんことを俟つなり。三日にして生きざれば、亦た生きず。)」という。